100円からのCD批評 Latin VOL.１

マークポイント	＜評価＞
●	安くても買って損した
●●	どうでも良い
●●●	まあ、いいんじゃな〜い
●●●●	かなり満足できた
●●●●●	非常に満足、してやったり！

＜１＞ブラジル

Caetano　Veloso
[LIVRO] 300円
{POLYGRAM/1997年発売　アメリカ盤未開封}　松戸にて

何とも信じがたかったのだが、驚愕のカエタ-ベローゾの未開封CDが偶然に見つかった。この時、他にも驚くような未開封CDが20〜30枚置いてあった。この店、例の全国展開のビデオレンタル店なのだが、輸入盤の大処分セールを夏に行うとは何を間違ったか、我々へそ曲がりマニアには驚くべき名盤の数々が300〜500円で未開封CD処分と相成っていました（その時期には集中的に通ってしまった）。若者の流行には合致しないマーケットが存在している認識が、店側に無いのが幸いした結果とは皮肉。 さて、中身はいつもの通り不思議の国ブラジルの現代ビッグアーティストらしく、千辺万化のカレードスコープカエターノワールド。併せてアホイ・バローゾの[NA BAIXA DO SAPATEIRO]、ガル・コスタでお馴染み旧作だが自作の[MIHNA VOZ, MIHNA VIDA]といったうれしい選曲もあり、昔からのカエターノファンにも気を遣ってくれてる（？）。 また、LIVROとはポルトガル語で｛本｝を意味するのだが、ジャケットデザインが何気ないようでも秀逸で、カエターノ自身の私小説を読ませているような感覚なのである。大満足。 満足度／●●●●●
（購入日：1999. 7.30）

＜２＞メキシコ

・Luis　Miguel
[ROMANCE] 400円

いまのリッキー・マーティン人気以上に、80年代終わりから90年代にかけてラテンワールドで活躍していたルイス・ミゲル。メヌード時代のR・マーティンは知らなかったが、子供時代からルイス・ミゲルはそれなりの人気者であった事は知っていたし、コンスタントにLPを出して実績を積んでいたが、このアルバムで全世界的にブレイク！！よく出来たアルバムである事は誰でも認めるラテン歌謡の1枚。過去にヒットしたラテン愛唱歌の数々が適度なセンチメンタリズムと今風のアレンジを施して登場。このコンセプトがあたらない訳がないラテンワールド。聴くたびにカラオケ嫌いのオイラでも、自然カラオケ状態！つぼにはまりすぎて、このCDが出た当時は早く

{WEA/1991年発売アメリカ盤}　高田馬場にて

手に入れたかったが、我慢のオジさん。5年たって再会し、感激のラテン愛聴盤のひとつ。 制作チームにあのアルマンド・マンサネーロが名を連ね、セッションメンバーはアメリカの名うてミュージシャン。フュージョンセンスにラテン歌謡がうまくマッチしている。セコハン店では比較的良く見られるおすすめ盤。 満足度／●●●●●　　（購入日　1996.6.10）

＜３＞メキシコ

Luis　Miguel　[SEGUNDO ROMANCE] 50円　{WEA/1994年発売アメリカ盤}　秋葉原にて

名作[ROMANCE]の続編ときたら買わない訳にはいかない。おまけに50円というクズ同然廃棄処分のノリではコチトラ涙もの。前作がかなり渋めの選曲でかつヒットポップスの二番手をねらって成功したが、今回はそれよりも強力な布陣をしいて、二匹目のドジョウをねらった。[EL DIA QUE ME QUIERAS][SOMOS NOVIOS][SOLAMENTE UNA VEZ][NOSOTROS][HISTRIA DE UN AMOR]といったこれ以上のラテンスタンダードナンバーはない程のメニューにちょいと驚き。制作チームやセッションメンバーの多くは前作とほとんど同じ。しかし、やはり前作を超えるとこまではいかなかった。名曲を集めすぎたせいか、前よりもベタつく感じが残ってしまった。 満足度／●●●　　（購入日　2001.1.15）

＜４＞ブラジル

Fernando Abreu [DA LATA] 350円　{EMI/1996年発売　国内盤}　　柏にて

Jウェーブの『サウージ・サウダージ』でヘヴィーローテーション（つまり、よくかかってたと言いたいだけ！）されてたので耳に残っていたが、1曲目の[VENTO LA LATA]がめちゃくちゃカッコ良いMPB音楽（Musica　Popular　Brasirala；ブラジルポピュラーの略）。LA LATAとはポルトガル語で『缶』の意味。ブラジル音楽はホントに洗練されてて、ブラジルに滞在中何気なくFM局に聞入っていたら、ニューヨークに居る時よりもNY的というかシティ感覚が体の中に入りこんできた不思議な経験があるが、まさにブラジルの音楽風土の先端性を明らかに提示してくれるCD。ロンドンのDJミックスとブラジルの土着性とリオっ子（カリオカ）の流行に敏感な姿勢がうまく合体して、アメリカやイギリスの人工的すぎる流行発信はブラジルの豊穣な音楽土壌の前には非力だと感じさせてくれる。 満足度／●●●　　（購入日　　2000.9.25）

＜５＞メキシコ

Selena　[DREAMING OF YOU] 100円　{EMI/1995年発売　アメリカ盤}　国立にて

正月の国立で100円処分コーナーで発見。95年に何やら事件に巻き込まれて死亡したメキシコの歌手で、彼女の遺作（というより追悼盤）。活動拠点は主にロスあたりらしく、英語とスペイン語のミックスでポップスを歌っていてそれなりに人気があって、その射殺事件が契機で日本でも彼女の存在を知らしめた。とりわけ光るものはコチトラ感じられないが、デビッド・バーンが作って共演してる[GOD`S CHILD(BAILA CONMIGO)]は、ウェイン・ワンの映画「ブルー・イン・ザ・フェイス」（「スモーク」の別ヴァージョン）で使われていた。いかにもニューヨークの下町あたりで流れて、ピッタリとはまる下卑た感じが良い。ハーヴェイ・カイテルの演技と同じく記憶に残っていて、すきな1曲である。 満足度／●●●　　（購入日　　2001.1.4）